

◆ 前置き

君の在り処の各ルートネタバレ、本編ネタバレが含まれます。
また、製作過程の話ではなく君の在り処シナリオを考察及び、解説している文章になっています。

予めご了承の上、お読みください。

本編が特に多いです。各ルートも掘り下げるときりがないので少しだけ。

みなみ様の同人紹介ページや、M・M様のM・Mの部屋でも感想を頂いております。

(ありがとうございます！)

みなみ様のお言葉をお借りすると、このゲームはごちゃごちゃ考えずに“絵美可愛い！あかり可愛い！ 麻衣子好き！”って言うてくれることを私も心から願います。

◆ 「君の在り処」は何を伝えるために書いたのか。

私にとっての人の意思(心)とは、**糸のよう**な**一本の糸**だと考えています。

人生を道のようなものだと例える方がいるかと思いますが、それが歩んできた過去にも繋がっているものならば、意思とは未来に続くものです。

それは道というにはあまりにも曖昧で不安定。だから、私は糸だと思ったのです。

恋愛とは、その糸が絡み合った状態のことだと思えます。

相手の意思を理解し、時に尊重し、互いが互いを見つめることで、決して切れることのない糸が出来上がる。

家庭、夫婦、そして恋人にはいくつもの試練が待ち受けております。

結婚、妊娠、育児、介護、そして人を支える責任です。

とても一本だけの糸では生きられない。

だから、人々の意思は絡み合いさらに強固な糸へとなる必要があると思うのです。

その一方で、人と人の意思が完全に調和することは不可能です。絡み合うだけで精一杯。

“私たちは赤い糸で結ばれているね”という表現もあるように、あれは正確には二本の糸で結ばれているべきです。

君の在り処とタイトルを付けたのは、糸という名の意思がどこに存在しているのかを見つめる旅路のようなものでした。

君の在り処とは、そうやって互いの意思をただひたすら共有していく物語です。

ただ、私は絡み合わない愛も存在すると思います。
絡み合うことを避けることもあると思います。

自分の意思一本だけで生きていく家庭もあると思います。
でも、つらくないですか。

自分の意思を理解してもらえないことはつらいことではないですか。

そして私にとって、相手の意思を理解できないことは同じぐらいつらいことです。

意思の絡み合いを避ける世界が現代にはあるでしょう。

でも、私が築く世界では絡み合うことを避けたくはない。

そうやって、君の在り処は出来ました。

——もう一つだけ、いいですか。

アガペー、無償の愛。

私は無償の愛が存在すると思っています。

この愛については、自分の子供に対してが最も適切な例かと思っています。

ただ私には子供もいませんし、結婚もしておりません。

でも、無償の愛を感じたことがあります。

私の家庭は母子家庭で、祖母に育てられました。

母は一日中、外に出て働き、昼間の面倒は祖母がずっと見てくれていました。

そんな祖母が、80歳を超えてついに認知症にかかってしまいました。

認知症といっても、アルツハイマー型というものが存在し、あらゆることを忘れてしま
うような認知症があります。

私の祖母はアルツハイマー型でした。

祖母は次第に小さい私が帰りを待っている、ご飯を上げないと……と記憶が逆走してい
って、ついには私の顔を見ても私が誰なのかわからなくなってしまいました。

「帰りたい、子供が待っている」と時には体中を殴られつらく当たられたものです。

私はその時、つらいという感情と同時にもう一つの感情が沸いていました。

そうまでして、記憶の中の私を追っているのです。

私はその時、なんてことだと思いました。

どうしようもなく手のかかる祖母、私の顔すら覚えていない祖母がとても愛おしく感じ
ました。

幼稚園の頃からずっと育ててくれた祖母です。好きという感情がそもそもないわけもあ
りませんが、その時の気持ちは全く別のものだったと言いつつ言い切ることが出来ます。

そうやって無償の愛は存在するのだと確信しています。

ただ、この愛の形はなかなか難しいものなのかもしれません。

実は君の在り処でも、無償の愛を伝えようと思うシーンはいくつか存在していましたが、あまりにもその存在は難しすぎてうまく伝えられていないと思っております。

ここからは各ルートに分けて少しだけ解説していきたいと思います。

◆ あかりルート

祐二は、一向にあかりの糸に気が付けません。

自分なりの価値観で、悪いことと良いことの見定めをしていくのですが、それだけでは時にすれ違いが生じます。

祐二は、絵美や麻衣子との関係を壊さないことであかりのことも考えておりました。

もしも、祐二とあかりの関係を大げさにしてしまえば、自ずと周りも空気を読んで絵美や麻衣子も気を使い、そうなれば今まで通りではいられなくなってしまう。などと考えていたのです。

あかりも祐二の考えは理解していたのですが、あくまで理解だけでした。

時折、感情というものがわからなくなつて、どうしようもなく暴れたくなります。

そんな時は、いつも祐二に甘えちゃうんです。

それを祐二はうまく知っているものだど勘違いしておりました。

そんな勘違いの連続だったからこそ、起きてはいけない大きな事件が起こります。

通称・オレンジジュース事件です。

あかりは、補修を終えられれば祐二と遊べる。そう考えているだけなのです。

じゃあ、なんでオレンジジュースを飲みに行ったのでしょうか。

そこには大きな落とし穴がありました。

絵美や麻衣子に、祐二の話が出来ないから誰にも祐二の話をする相手がないことです。

意外と恋人の自慢とか、話をしたい方っていらっしやいますよね。

惚気でもいいし、なんでもいい。とにかく話したいって気持ちある方、いますよね。

そんな気持ちがあかりにはとても強く、でも誰もいなかったんです。

祐二はそのことを知る由もありません。

補修を受けている相手がただ異性であったためだけで、ついに二人はすれ違ってしまつたのです。

そしてそんな状況も、あることをきっかけに変化がやってきました。

絵美の存在です。

それでも祐二は悪いことをしたつもりがないので、いつまでもきつかけを自分から作り出すことが出来ずうじうじとしてしまいます。

そこで、あかりが祐二を訪ねてきて謝るシーンに繋がります。

実際は、このシーンのあかりって喜んでるんです。

久々に祐二からメールをもらって、本当に喜んでるんです。

あかりはとても明るく根はポジティブな女の子ですもん。

だから、お洋服だって気合を入れてスカートを着てきてるんです。

でも、実際は違った、必死だった。

あかりは祐二を手放したくなくて気が付いたら必死になってました。

夏休み中、祐二と出かけるために買った、新品のお洋服で唯一の勝負服なのに、気が付けば涙でびしょ濡れでした。

この点は、後日お気に入りだとあやふやにしていますが、普段ジャージの女の子があんなかわいい服を着ているわけないですから。

話を戻します。

本当に必死だったあかりの気持ちを受け取った祐二は、あかりの糸に触れ、これをきっかけに互いの糸の存在を確認しあい、もう一度だけチャンスが欲しいとなりました。

決して楽な道のり何かではありません。

相手の糸を見つけたところで、まだ何も始まっていないのですから。

互いの糸を理解し、尊重し、支えあうことで、その糸は絶妙なバランスで絡み合っています。それは時に信頼だったり、依存だったりします。

あかりルートの結末は、少しずつ絡み合っていく様を描いたまま、終わりを迎えています。決して、今だけの形でなく互いが互いを知っていくことを望んだからこそ、最後のシーン。

麻衣子の行動に戸惑っている祐二の背中をあかりは押し出したんだと思います。

私にとってあのシーンは、心がきゅーと締め付けられました。

あかりの糸は、とても強いんだなって感じずにはいられないシーンになりました。

◆ 絵美のルート

絵美のルートでも、互いの糸が見え隠れします。

絵美ルートでとにかく押しかったのは、この糸とは個人のものであり、決して同じものなど存在しないんだと強く主張したかったんです。

なぜかって、それは絵美だったからです。

絵美は、とても強く不器用な子です。

頭が良いのに、相手の感情を理解することが苦手です。

自分の考えでほぼ全てが完結してしまう子なんです。

だからこそ、絵美の糸はととても糸らしい糸にしたいと思っていました。

祐二はととても鈍感で、バカです。

だからこそ、絵美の優しさを単純な優しさと真摯に受け止めすぎていました。

そしてそれは、あることをきつかけにはち切れます。

いっぱいになってしまったのは、待ちきれない絵美の感情でした。

相手を好きで好きでどうしようもなくなつて、気持ちを完結（終わらせて）しまったのです。

それでも絵美は強い子でした。

相手のためになる最善を考え、決して相手に迷惑のかからないようベストを尽くしました。

でも、それは絵美の糸です。

決して祐二の糸ではないのです。

祐二にとって、絵美の行動は良く分からないことの連続でした。

時にその態度は、自分を嫌っているのかもしれないと思わせてしまったりもすることでしょう。

なんて面倒くさく可愛い子なんでしょうか。

気が付けば祐二にとって、絵美はかけがえのない存在になっていました。

そこで祐二は考えました。絵美にとって、自分とはどういった存在なのか。

ぐちゃぐちゃになって乱れる心の中、あかりが手を指し伸ばします。

“あまり考え過ぎちゃダメ” 自分以外のことはわからないだから、自分の気持ちを直接話すしかないんだって教えてくれます。

気が付けば祐二の頭の中も絵美でいっぱいだったんです。

少しずつ祐二の糸と絵美の糸が触れ合い始めるところを楽しんで頂けると嬉しいルートになっていました。

ちなみに、絵美が親と帰省し、祐二と絵美が電話でやり取りをしている時の祐二が結構好きです。

また一番最後ののですが、絵美がしがみつくシーン。

あれは何を伝えたかったのか、と言いますと。

絵美にとつてはまだ祐二の糸が見えていないことを表したかったのです。

だからこそ、とてつもなく強い拒絶反応を見せます。

でも、それは祐二によって治まってしまいました。

プレイしている方は、なんじゃこりゃと思っただ方もいらっしゃるかもしれません。

私にとって絵美があれば納得してしまっただ理由は、絵美にとって理解の出来ないことが起こり、これが祐二の糸なんだと初めて絵美が感じられたからです。

祐二の糸には、絵美が常に存在していました。強く絵美を思っていました。

それを初めて実感したんです。

これから少しずつ互いの糸は絡み合い、強い糸へと成長することだと思います。

◆ 麻衣子ルート

このルートでは、早い段階から祐二の糸は見え始めるのですが、麻衣子の存在自体が無いものを掴むかのようで、中々プレイヤーにも掴ませてもらえません。

あまりにも存在を感じられないからか、祐二は自然と麻衣子の糸自体を探し始めようとしています。

なぜ、麻衣子はそれほど自分を大切にしてくれるのか。

なぜ、麻衣子はそれほど過去を欲しているのか。

麻衣子も同様に祐二くんを好きになろうと思います。

互いの気持ちはあくまで理想であり、報われることなく、答えも一向にやってきません。気が付いたら、エンディングを迎えてしまいました。

でも、エンディングを終え初めて麻衣子の糸がハッキリと見えます。

それは既に、祐くんという人物と絡み合った糸でした。

あまりにも衝撃的な展開で、祐二は身を裂くような思いだったでしょう。

それでも祐二にとって麻衣子とはかけがえのない存在で、既に答えだつて出ていたので、す。

“麻衣子がどんな存在であっても、それを受け入れたいと。”

無償の愛ですね。

強く結び合う糸を間接的に眺めてしまうルートでした。

◆ トウルーエンド

これは、家族と仲間が題材になっています。

今までの恋愛とは打って変わって、愛に様変わりしています。

人を愛することのすばらしさ、そして難しさを伝えたかったルートです。

トウルーエンドをプレイした方は分かるかと思いますが、このルートは祐二ルートでも

ありました。

祐二のテーマソングがかかるルートです。

幼き頃の祐二が、どれだけの想いを抱え今に至るのが書かれております。

麻衣子ルートとトゥルーエンドでの大きな違い……分岐点としましては、麻衣子が祐二の母親を知らなかったところを大きく取り上げていることです。

察しの良い方は、麻衣子ルートをやり終えた後になぜ麻衣子は祐二の母親を知らないのだろうと思っていたことと思います。麻衣子ルートでは麻衣子が祐二の母親から髪飾りをもらったと言っているのですから、わからないわけがないんです。

夏休み前にひどいことを言ってしまった麻衣子が、夏休み中に祐二を訪ねて早朝に家までやってくるシーン。麻衣子は偶然、祐二の父親と挨拶を交わします。

その時でした、祐二の母親と顔を合わせたのは。

少し動揺を見せながらも麻衣子は、挨拶をします。

「あ、おはようございます」

「あれ——君は確か」

「ご無沙汰してます。麻衣子です」

「そうそう——見違えたね」

「えへへ、ありがとうございます」

「でも、その変わらないね、確か引越したんじゃない？」

「今月、引越してきました」

「へえ、そうだったんだ」

「あれ——失礼ですが、そちらの方は？」

「ああ、奥さんだよ」

「そうなんですか」

「うん、幸せにやってるよ」

「よろしくね、麻衣子ちゃん」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

当然、祐二の父親もそのことを察して妻を紹介しています。

祐二は二階でそのやりとりを聞いていましたが、それがどれほどの含みを持っているのかなど、この時点での祐二にはわかりませんでした。

そして、麻衣子はまず戸惑いました。

自分が祐くんを尋ねに来たとき、祐二くんは覚えていなくて、それがあまりにも辛くて

自分本位にばかり物事を考えていたこと……それが初めて見えたのです。何もわからなくなってしまうた麻衣子は祐二に選択肢として問いを送ります。

あかり、絵美、そして私のことをどう思っているのかの選択肢です。

トゥルーエンドに入るには、各ルートを攻略後に出現する選択肢を選択する必要があります。

つまり、ヒロインを攻略しないと大切だと答えられなくなっています。

ヒロインカラーに合わせて、選択肢には点灯する演出を入れていました。

戸惑いの中、祐二から大切だと告げられた麻衣子は、本来は謝るつもりで来たにも関わらず珍しく本音が溢れます。

「俺も麻衣子のことが知りたい」

「何を知りたいの？」

「俺たちの思い出ってなんなのか。麻衣子が大切にしている思い出ってどんなものなのか、俺は知りたい」

「嘘かもしれないよ？」

「麻衣子のことを見ていれば、嘘をついてないことはわかる」

「知らない方が良いことかもしれないよ？」

「なんで、麻衣子はそう思うんだ？」

「えへへ、なんでだろ……」

麻衣子は困った笑いを浮かべている。

俺は忘れてしまったものがあるなら取り戻したい。

だって、それを思い出してからでも考えるのは遅くないと思うから。

「不安なの」

「不安……？」

「あかりちゃん、絵美ちゃんのこと、忘れないでね」

そのまま会話は続くのですが、最終的に麻衣子は体を震わせながら家を後にします。

ピーンと張り詰めた糸では、絡み合うことはかありません。お互いが理解しあい、寄り添おうとしてもやっぱり難しいと思います。

そんな祐二と麻衣子を救ってくれたのは、あかりや絵美の存在でした。

麻衣子には、まいこんというあだ名が付き楽しそうに話しています。

絵美は、祐二のことを“もっとお節介な奴”と言ってくれ、あかりは“心配だよ”って言ってくれます。

そんな二人の存在に、祐二の張り詰めていた糸を少しずついつもの調子に戻していきま
す。

そして、麻衣子のお泊りシーンですね。

祐二と麻衣子がとても楽しそうで、心ぼかぼかするシーンにするつもりだったのですが、
皆さんにはどう映ったのでしょうか。

このシーンでは、一つだけ拘ったシーンがありました。

麻衣子が眠っている祐二を膝枕するシーンです。

慌てて起き上がろうとする祐二を麻衣子が押さえつけます。

「もう少し、このままで居て」

この言葉には、実は裏がありました。

この後に展開される話であったシーンなのですが、アルバムに麻衣子と祐二が写ってい
る写真が挟まれていることがあります。

実は、この時に麻衣子はアルバムをチェックしていました。

それは、ただの答え合わせだったと思います。

答えがわかると麻衣子はゆっくり、あの写真を挟みます。

麻衣子だって心はとても切なかつたと思います。

だからこそ、祐二くに寄り添いたくて膝枕をしました。

そして、呼吸を整えると麻衣子はある問いを投げかけます。

「——祐二くん。もしも、忘れられた人と忘れてしまった人が居て、その二人どちらの
ほうが辛いと思う？」

この問いは、自然にとらえると麻衣子と祐二のことだと思ってしまう。

もちろん、祐二はそうだと勘違いして答えます。

麻衣子の例えは、あまりにも分かりやすい。

俺たち二人のことを話しているんだとすぐにわかった。

「俺は、忘れられた人が辛いと思う」

この時、麻衣子ならやっぱり祐二くんは優しいなって思ったことでしょう。

だからこそ、これから先に起こるかもしれない未来が現実になったら辛いなって思ったはずです。

麻衣子はその気持ちを自分に言い聞かせるかのように放ちます。

「——私は、忘れてしまった人だと思うの」

このやり取りには、お互いを思いやるシーンではなく、これから起こされる未来が強く含まれているところでした。

結局のところ、祐二の過去を知らせたのは麻衣子ですし、なぜそういった物語が存在してしまったのかをここで話すと途方もなくなってしまうので割愛させて頂きませんが、最後の方のシーンで麻衣子が伝えようとしています。

麻衣子の中に存在する祐くんは大きすぎて、心が叫びたがっているのを感じ続けていた。そして、自分を知れば知るほど、その気持ちは大きくなっていくのを感じていたと。

そういった葛藤が常に行われていたと思います。

ちなみにOPにも、“わたしの心 叫び始めている”という歌詞が存在しています。

その後のシーンにも解説したいところはあるのですが、特に1点。

祐二の産みの親が放つ、“あなたは私の宝物”や“いつかあなたの子供が見たいわ”といったワードは心に響きました。

無償の愛をより強く表現出来たと思えたシーンです。

祐二は悲しみの中でも希望を与えられました。

祐二の家族は、正直仲が良いとは言にくい状態でした。

父親は常に罪悪感を抱き、祐二を愛しているからこそ、自分の欲求を優先してしまったことを許されないことだと認識していました。

ついにその時がやってきますが、祐二から出た言葉は驚くべき言葉でした。

「正直、離婚とか結婚とか俺にはまだまだ分からないことしかない。でも、小百合さんは俺の子供を見たいと言ってくれた」

「こんな俺に、家庭を持てと勇気をくれたんだ——」

「だから父さんは、俺に家庭の素晴らしさを伝える義務がある」

このセリフには物凄い偏見もありますが、親というものは子に家庭を持てと教えること

